

第1010回オーチャード定期演奏会

2月24日(月・祝) 15:00開演 Bunkamura オーチャードホール

第1011回サントリー定期シリーズ

2月25日(火) 19:00開演 サントリーホール

第167回東京オペラシティ定期シリーズ

2月26日(水) 19:00開演 東京オペラシティ コンサートホール

2/24

2/25

2/26

指揮・ピアノ：チョン・ミョンフン

ヴァイオリン：前田妃奈\*

チェロ：ハン・ジェミン\*

コンサートマスター：三浦章宏

ベートーヴェン：

ピアノ、ヴァイオリンとチェロのための  
三重協奏曲 八長調 Op. 56\* (約38分)

- I. アレグロ
- II. ラルゴ
- III. ロンド・アツラ・ポラッカ

— 休憩 (約15分) —

ベートーヴェン：

交響曲第3番 変ホ長調 Op. 55『英雄』(約50分)

- I. アレグロ・コン・ブリオ
- II. 葬送行進曲：アダージョ・アツサイ
- III. スケルツォ：アレグロ・ヴィヴァーチェ
- IV. フィナーレ：アレグロ・モルト

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業) | 独立行政法人日本芸術文化振興会  
協力：Bunkamura (2/24)文化庁  
Agency for Cultural Affairs,  
Government of Japan

- ♪本公演は全席指定です。指定のお席にご着席ください。演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なる席への着席をお願いすることがございます。
- ♪演奏中のご入場は、固くお断りいたします。楽章間のご入場は楽曲の進行によりスタッフのご案内いたします。入場いただけない場合もございますのでご了承ください。
- ♪曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。
- ♪演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。
- ♪演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。終演後のカーテンコールも、マナーを守ってお楽しみください。

## 出演者プロフィール



©上野隆文

指揮

チョン・ミョンフン

Myung-Whun Chung, conductor

東京フィルハーモニー交響楽団 名誉音楽監督

韓国ソウル生まれ。マンネス音楽学校、ジュリアード音楽院でピアノと指揮法を学ぶ。1974年チャイコフスキー国際コンクール ピアノ部門第2位。その後ロスアンジェルス・フィルにてジュリーニのアシスタントとなり、後に副指揮者。ザールブリュッケン放送響音楽監督および首席指揮者(1984～1989)、パリ・オペラ座バスターユ音楽監督(1989～1994)、ローマ・サンタチェチーリア管首席指揮者(1997～2005)、フランス国立放送フィル音楽監督(2000～2015)。現在は名誉音楽監督、ソウル・フィル音楽監督(2006～2015)、シュターツカペレ・ドレスデンの首席客演指揮者(2012～)など歴任。1997年に本人が創設したアジア・フィルの音楽監督も務める。2022年6月、イタリア共和国功績勲章であるグランドオフィサーの称号を長年にわたるイタリアの文化発展への貢献に対して受勲。2023年3月、イタリア・ミラノのスカラ・フィルハーモニー管弦楽団として初めての名誉指揮者に就任した。

2001年東京フィルハーモニー交響楽団のスペシャル・アーティスティック・アドヴァイザーに就任、2010年より桂冠名譽指揮者、2016年9月に名誉音楽監督に就任。ピアニストとして室内楽公演に出演するほか、アジアの若い演奏家への支援、ユニセフ親善大使、アジアの平和を願う活動など多岐にわたり活躍している。

2/24

2/25

2/26



©Taira Tairadate

ヴァイオリン

## 前田妃奈

Hina Maeda, violin

2022年第16回ヘンリック・ヴィエニャフスキ国際ヴァイオリンコンクールで優勝し、国際的に注目を集める。19年日本音楽コンクール第2位及び岩谷賞（聴衆賞）、20年東京音楽コンクール第1位及び聴衆賞など輝かしい受賞歴を誇る。令和4年度（2022年度）大阪文化祭奨励賞受賞。第25回（2023年度）ホテルオークラ音楽賞受賞。第33回出光音楽賞受賞。公益財団法人江副記念リクルート財団第48回奨学生。現在、東京音楽大学アーティストディプロマコース在学中。使用楽器は、日本音楽財団より貸与されているストラディヴァリウス1700年製ヴァイオリン「ドラゴネッティ」。



©Shin Joang Kim

チェロ

## ハン・ジェミン

Jaemin Han, cello

2006年韓国のウォンジュに生まれたチェリスト、ハン・ジェミンは、2021年にジョルジュ・エネスコ国際コンクールで最年少優勝を果たし、国際的に知られるようになった。その後、ロッテルダム・フィルやルクセンブルク・フィルなど、名だたるオーケストラと共演。2024年には、フランクフルト放送交響楽団とバーミンガム市交響楽団にデビューし、「BBCプロムス・イン・コリア」でソリストを務めた。ドイツのクロンベルク・アカデミーでヴォルフガング＝エマニュエル・シュミットに師事、サムスン文化財団から貸与されたジョヴァンニ・グランチーノのチェロを演奏している。

楽  
曲  
紹  
介

解説=越懸澤麻衣

1804年6月9日、ウィーンにあるロプコヴィッツ侯爵邸のホールで「リハーサル」が行われた。そこで演奏されたのは、本日の演奏会と同じルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)の『三重協奏曲』と交響曲第3番『英雄』。この催しは一般に公開されていたのではなく、招待された人々しか入場が許されなかったとはいえ、どちらもこの日が初演であった。こうしたリハーサルの機会は、ベートーヴェンにとって重要であったに違いない。というのも、ロプコヴィッツ侯爵が雇っているオーケストラを使って、自作を音にして確認できたからである。実際、これら2曲はその後いくらかの改訂を経て、公の場で初演され、そして楽譜が出版された。もちろん音楽をこよなく愛する貴族にとっても、一般の市民よりも先にベートーヴェンの新作を聴けることは大いなる喜びだったであろう。作曲者は30代半ば、のちに「傑作の森」と呼ばれる時期のことである。

ベ  
ー  
ト  
ー  
ヴ  
ェ  
ンピ  
ア  
ノ  
、  
ヴァ  
イ  
オ  
リ  
ン  
と  
チェ  
ロ  
の  
た  
め  
の  
三  
重  
協  
奏  
曲  
 八  
長  
調  
 Op. 56

『三重協奏曲(トリプル・コンチェルト)』と呼ばれるこの作品の大きな特徴は、まずその編成にある。すなわち、その名のとおり「協奏曲」でありつつ、ピアノ、ヴァイオリン、チェロという3つの独奏楽器による「ピアノ三重奏曲」のような性格も併せ持っている。

今日、協奏曲というと、ひとりの独奏者が大勢のオーケストラと共演するというイメージが強いが、当時は必ずしもそうではなかった。「サンフォニー・コンセルタント(協奏交響曲)」というジャンルがそれである。この独奏楽器が複数ある協奏曲は、ベートーヴェンの生前に500曲以上も作曲されたそうで、とくにフランスで人気が高かった。このジャンルで最も有名なモーツァルトの『ヴァイオリンとヴィオラのための二重協奏曲』は、まさにパリで作曲された作品である。1804年の春頃に比較的短期間で書き上げられたこの『三重協奏曲』も、この頃ベートーヴェンがパリへの演奏旅行を企てていたことと関係しているのかもしれない(ただし、1807年に出版された初版に付けられたフランス語のタイトルは「GRAND CONCERTO CONCERTANT」、直訳すると「大協奏的協奏曲」であった)。

結局パリ旅行は実現せず、この曲はライプツィヒのゲヴァントハウスで1808年2月18日に公開初演された。しかしこのときの演奏はあまり話題にならなかった。その後も現在に至るまで、演奏される機会はさほど多くなく、ベートーヴェンの協奏曲のなかで最も成功していない作品などと否定的に見なされることもある。けれども、3人の独奏者の妙技、そしてオーケストラとの掛け合いを楽しめる魅力的な作品である。

第1楽章は、トゥッティのチェロとコントラバスで主題が提示される。主題を典型的なヴァイオリンではなく低弦に担わせるというアイデアは、交響曲第3番『英雄』や『ラズモフスキー四重奏曲第1番』にも共通するもので、この時期のベートーヴェンが好んだ手法だ。ここでは、ベートーヴェンお得意の主題労作というより、旋律的な楽想が次々と紡ぎ出されてゆく。続く第2楽章は短く経過的で、オーケストラの編成も小さくなるため、いっそう室内楽の要素が強く出ている。そして切れ目なく第3楽章アツラ・ポラッカへ。ここでも独奏チェロが最初に主題を提示し、それがロンド主題として何度も繰り返される。もちろん、ポロネーズに典型的なリズムも聴かれ、活き活きとした雰囲気醸し出している。ちなみに、19世紀前半はポロネーズがワルツと並んで非常に好まれた舞曲だったからか、単独のピアノ用編曲が「ポロネーズ」として多く出版されるなど、この楽章はとくに人気があったようだ。

【作曲年代】1804年 【初演】1808年2月18日、ライプツィヒ、ゲヴァントハウスにて  
【楽器編成】フルート、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部、独奏ピアノ、独奏ヴァイオリン、独奏チェロ

## ベートーヴェン 交響曲第3番 変ホ長調 Op. 55『英雄』

交響曲第3番『英雄』は、交響曲の歴史に新たな地平を刻んだ革新的な1曲と言えるだろう。この作品に結実することになる最初の楽想は、1802年秋頃のスケッチ帳に見出せる。ベートーヴェンが座付き作曲家としてアン・デア・ウィーン劇場に住んでいた頃のことである。1803年に本格的に作曲が進められ、この年の末あるいは翌1804年のはじめにほぼ書き上げられた。

ボンにいた若い頃からフランス革命の精神に共鳴していたベートーヴェンは、こ

の時期フランスへの関心を高めていた。前述のように彼はパリへの演奏旅行を計画し、交響曲第3番をパリで初演しようとしていた。さらに、この曲をナポレオンに献上しようと考えていた時期さえある。

ベートーヴェンのフランスへの志向は、『三重協奏曲』と同様、この交響曲の作風からも感じられる。とくに顕著なのは、第2楽章の葬送行進曲だ。フランス革命の式典音楽として、この頃パリで活躍した作曲家たちは特徴的な付点リズムや打楽器が用いられる葬送行進曲をしばしば作曲した。彼らの葬送行進曲は当時のウィーンでも知られており、ベートーヴェンもそうした様式を意識していたと思われる。

作品全体の長さは、それまでの交響曲とは比べものにならないほど長大になった。初版のヴァイオリンのパート譜に、「意図的に通常より長く書かれている」という注意書きがあるほどだ（もっとも、ブルックナーやマーラーのようなさらに長い交響曲も知っている今日の聴衆には、そこまで異例には感じられないだろうけれども）。

一方、その充実した響きからは意外に思われるかもしれないが、オーケストラの編成はホルンが1本増えて3本使われている以外、その規模はそれまでと変わらない。ただし、そのホルンは第1楽章の再現部で予想を裏切るタイミングで主題を再現したり、スケルツォの第3楽章のトリオで狩りを思わせるパッセージを奏でたりと、大活躍する。

交響曲は伝統的に第1楽章が最も重視され、その後の3つの楽章は軽めに書かれる傾向があったが、この作品は（たしかにソナタ形式の第1楽章も大規模で綿密に展開されるが）フィナーレに力点が置かれることも特徴的である。この終楽章は変奏曲でありつつ、ソナタやロンドの要素も混在する独特なもの。それまでにも『12のコントルダンス』、バレエ音楽『プロメテウスの創造物』、そして『ピアノのための自作主題による15の変奏曲とフーガ』で用いられた主題から、多彩な音楽が導き出される。

【作曲年代】1803～04年 【初演】1805年4月7日、ウィーン、アン・デア・ウィーン劇場にて作曲家自身の指揮による

【楽器編成】フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

こしかげざわ・まい／宮城学院女子大学学芸学部音楽科特任准教授、洗足学園音楽大学非常勤講師、日本ベートーヴェンクライス理事。東京藝術大学大学院音楽研究科博士後期課程修了。著書に『ベートーヴェンとパロック音楽：「楽聖」は先人から何を学んだか』（音楽之友社）、『大正時代の音楽文化とセノオ楽譜』（小鳥遊書房）がある。